

日中禁忌文化の比較

——丙午と羊年禁忌の俗信を中心に——

董 青

はじめに

干支は十干と十二支を組み合わせたものであり、中国の上古に始まる暦法上の用語である。十干は甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸であり、十二支は、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥である。日に記号をつけて表す干支記日法は中国の殷代から始められ、中国と日本で共通に今日まで継続している。また、紀元前4世紀頃、十干が五行（木、火、土、金、水）に配当され、年に干支をつけて表す干支記年法は前3世紀頃から行われ、前2世紀頃十二支が鼠、牛、虎、兎、竜、蛇、馬、羊、猿、鶏、犬、猪の十二獣に配当され、やはり中国・日本と共通に今日まで継続している。漢代から、干支の組合せが占星術や五行説等、その他の説と結びつき、禁忌の俗信が盛んに行われるようになった。

禁忌には信仰上と俗信上とを問わず二つの面がある。つまり、神聖なものに対して身を慎む場合と、穢れに対してそれを忌む場合がある。日本に流布している禁忌の俗信は無数であり、その中で天文暦法に関係のあるものも少なくない。年では丙午、歳では厄年、方角では鬼門、日では友引、縁起では戌の日、縁談では男女合性、運勢では易・九星・姓名判断・人相相をその代表的なものとする。そしてこれらの殆どものは天地五行説から発生しまたは五行相生相克で説明されており、易の陰陽説と数の神秘観とも多かれ少なかれ関係している。

中国古代の天文暦法や宇宙人生観から影響を受けていることから、これ

らの俗信の源を問えば、大半の俗信の発生は「中国から伝来した」と説明されている。本論は今日になっても日本で信じられている丙午の俗信と中国で広く伝えられている「羊年禁忌」の俗信を中心に、禁忌俗信の発生及び変遷過程を明らかにし、類似した俗信が日中両国においてどのような由来があるのか、それはまたどのような現状になっているのだろうか、同じ俗信が異なる宗教や文化においてどういうふうを受容されるのか、なぜそのような変容と相違ができたのかなどを、解明しようと思う。

一、丙午と羊年禁忌の俗信について

禁忌に関しては、俗信と迷信という二つの用語がある。俗信というのは、超人間的な力の存在を信じ、それに対処する知識や技術であって、非常に基本的な、広い範囲の文化表象の一つである。個々の俗信はそれほど長い生命を保つものばかりではなく、絶えず生起消滅して、伝承において回転の早いものなのである。一方、迷信というのは、間違っただけで信じられていること、あるいは人を迷いに導く信仰ということであろうが、主観的であって基準のおきどころもない。従って学術用語としては、なるべく使わないほうがよいと思われる¹。本論では、引用した内容を除き、すべての禁忌を「俗信」とする。

1、丙午俗信

「丙午（ひのえうま）」という言葉について、『広辞苑』に、「干支の第43で、十干のひのえと十二支のうまに当たる年、または日。五行説によって丙は火の兄、午は正南であるので、この年には火災が多いとする。また、この年生まれの子は夫を殺すという迷信がある²」という解説がある。また、『日本大百科全書』に、「宿曜雑暦から発展した俗信。(中略) 丙は火の兄、午は正南の火であるところから、この年には火災が多いと信じられ、中国では北宋時代の末から、丙午を凶歳とする説が強まったが、これが日本にも伝わり、江戸時代には下級宗教者の手で村々に広まる間に、丙午の女は

夫を食い殺すなどの俗説を生じた(中略)³とある。以上の解説でも分かるように、丙午の俗信とは、中国より伝来した丙午の凶歳説から影響を受け、丙も陽火であり、午も陽火であるから、火に火を加えるのは良くないし、火災が多いとされる。また、午は「馬」の連想から「元気がよい」というイメージを付与され、丙午年生まれ女性は実に元気がよく、ひいては夫を殺すなどという俗信が日本で生まれたのである。

中国では『辞海』に「丙午」という言葉が載せられていないが、「丙丁」については、『呂氏春秋・孟夏』の「其の日は丙丁なり」に「丙丁、火の日なり」と高誘が注釈し、丙丁が五行で火に属し、火の別称とされているという⁴。即ち、現代中国語では「丙午」よりも「丙丁」のほうが火の異称である。

2、羊年禁忌の俗信

日本と同じように十二支が十二獣に配当されるから、中国で広く伝えられている「羊年禁忌」とは、未年生まれ女性が結婚するとその夫は死んでしまうという俗信である。関立勲の『中国文化雑説』によると、「女が未年生まれなら未亡人になる」や「男は未年生まれなら、莫大な財産をもち、食糧を持たずに出かけてもかまわない。女は未年生まれなら、強く固いものであり、夫とも両親とも相克する」などの言い習わしは今でも各地に残っているという⁵。

『辞海』によると、「羊」は「祥」に通じ、元来吉祥、良いというプラスの意味を持っていたという解説がある⁶。いつ頃から災いや凶事といった意味と結び付くようになったのかを考えると、とても複雑な問題であるので、詳しくは後で述べようと思う。まずここでは「羊」に関係ある「紅羊劫」という言葉について述べる。「紅羊劫」について、『大漢和辞典』に、「宋の理宗の淳祐中、柴望が丙丁龜鑑十卷を上った。秦の莊襄王五十三年丙午から晋の天福十二年丁未に至る 1260 年中、丙午、丁未に当たるもの三十有一、其の年は皆中国に乱事があったので、望は上書して時君・後人

を戒めようとしたものである。丙は火に属して色赤く、未は羊。これより国難の時を紅羊劫歳というに至った⁷とある。また『大漢和辞典』に「丙午丁未」に関して、「ひのえうまの年と、ひのとひつじの年。昔はこの兩年は厄年として忌んだ。内乱がなければ、夷狄の外患があるという⁸と記されてある。これらのことから、丙午俗信にせよ、羊年禁忌の俗信にせよ、すべてこの「丙午・丁未」厄年説から発足したと言えるだろう。

二、先行研究について

日本では、文部省迷信調査協議会は『迷信の実態』で中国の『容斎五筆』等の出典を引用し、丙午と火事との間に関係があると思われる理由を究明し、また江戸時代から女だけが忌まれるようになる経緯を解明しようとしている。「迷信中その直接の惨害の甚しいのは丙午の右に出るものはあるまい⁹と指摘した。紺谷友昭は「拡大する時の俗信」で丙午俗信の起源を分析し、また1906年と1966年前後の人口出生数、出生率、死産数、死産率及び女出生児の男出生児に対する比率をめぐり比較研究を行い、教育・マスメディア・集団盲従的意識による俗信拡大への影響を検討している。佐藤幸治は『文化としての暦』で俗信と縁日を論じた時、「丙午神話」を顕著な例としてその根拠、由来と影響を説いている。板橋春夫は『誕生と死の民俗学』で江戸時代の丙午俗信、丙午女性の受難、人生儀礼における丙午伝承、年中行事における丙午習俗、昭和四十一年の丙午と出産及び丙午俗信追放運動等の面に渡って、丙午俗信に見る命の認識と選択を論じている。富士川遊は『信仰と迷信、民俗怪異篇』で、「蛤にせつせつ坐る丙午」や「丙午しっかり重荷つけて来る」等の狂句を挙げ、丙午に生まれた女が夫を殺すので生涯幾度も花嫁となったり、結婚難のため持参金が沢山でなければ嫁に行くことができなかつたことなどを述べている。また、丙午に関する文献を列挙し、「迷信は何時の頃に始まったか、その歴史を明らかにすることは容易でない¹⁰と論じている。

一方、中国では、羊年禁忌など十二支への好き嫌いが出生人口数の変動

に影響を与えているか否か、それについて正否両様の研究成果がある。まず、段成栄・王芸佳は「从『停电婴儿』到『羊年不宜生子』——兼论如何科学地分析人口现象」で1954年から1999年にかけて羊年禁忌は全国範囲において人口出生に与えた実質的な影響が見られないと論じている。馬妍は「吉年生吉子？中国生肖偏好的实证研究——基於1949-2008年出生人口数」で中国における全体的な十二支への偏好が存在していないという結論を証明している。一方、于偉紅ほか、劉惠萍と馬妍はそれぞれ河北省、山東省威海市と北京市を対象に、各地の出生人口規模の変動と生育率の増減が十二支に関連していると主張している。郭震威ほかは「对羊年生育回避效应再讨论」で「1949年以来わが国には羊年への生育回避現象があり、特に北方地方ではその反応は目覚しく、1980年以降は弱まってきた」¹¹と述べた。また譚遠發ほかは「生肖偏好与命運差異——為何『竜年生吉子、羊年忌生子』？」で「竜年の出産は縁起のよいことであり、羊年の出産を避けるべきである」という俗信に対して、実証研究に基づき、「十二支への偏好がある程度に存在しており、竜年への偏好は最高ではないが、羊年への偏好は最低である」¹²と論じている。

以上のように、日中両国で展開された先行研究は民俗学、歴史学と統計学等幅広い分野に渡っているが、日中の文化や民俗の比較に関して若干の研究があるものの、禁忌文化に関する比較研究はそれほど注目されていない。丙午俗信と羊年禁忌の比較研究に言及した文献が殆ど見付からないのである。したがって、両者の由来と変遷、また今の現状について、どういう共通点と相違点があるか、本論を通して究明しようと思う。

三、俗信の由来

上述したように、丙午俗信でも、羊年禁忌の俗信でも、「丙午・丁未」厄年説に関係があると思われる。宋の柴望が『丙丁龜鑑』でこの厄年説を戒めたほか、宋の俞文豹は『吹劍録』で、「丙午・丁未の年中国之に遇えば、必ず災あり」と述べた。また、宋の洪邁は『容齋五筆』で、「丙午・丁未の

歳、中国之に遇えば、即ち变故あり。禍内に生せずんば、即ち夷狄外侮す」と述べた。洪邁は更に紀元前 195 年（丙午）に前漢の高祖劉邦が死去し、実権が全て皇后の呂雉に握られ、劉氏の皇族が殆ど呂后に粛清された史実から、公元 1126 年（丙午）— 1127 年（丁未）靖康の変で金により首都開封が陥落させられ、北宋が滅亡した事件、及び公元 1187 年（丁未）宋高宗趙構の死去に至るまで、歴史上丙午と丁未の年に起こった数多くの变故の例をあげ、「総じて之を言えば、大抵丁未の災は丙午よりも惨なり。昭たる天象・運行に見われ、人力の能く為す所に非るなり」¹³と断言している。

1、丙午俗信

中国で宋代から固定化していったこの「丙午・丁未」厄年説は日本に伝わり、江戸時代に丙午の女が夫を食い殺すという俗信に変わってきた経緯は一体どうだろうか。「火事と喧嘩は江戸の華」と言われるように、江戸時代に江戸の火事は頻繁に発生し、大火が頻発したという。『迷信の実態』には、「コケラ葺の多かった徳川時代の市街では火事は甚だ恐るべきものであったので、丙午と火災を結び付けたのであろう。火事に直接的関係の少なそうな丁未は従って無視された」¹⁴とある。また、国立公文書館の「天下大變一資料に見る江戸時代の災害一」¹⁵では、地震、噴火、水害、火事、飢饉など、江戸時代の人々を襲った大災害を記録した史料を展示している。その年表に記載されている江戸大火は次の通りである。

明暦三年（1657 年）江戸大火（振袖火事）

寛文八年（1668 年）江戸大火

天和二年（1682 年）江戸大火（お七火事）

元禄十一年（1698 年）江戸大火（勅額火事）

明和九年（1772 年）江戸大火（目黒行人坂火事）

文化三年（1806 年）江戸大火（車町火事）

文政十二年（1829 年）江戸大火（佐久間町火事）

また、江戸のほか関西で起こった火事も同年表に記載されている。

宝永五年（1708年）京都大火
享保九年（1724年）大坂大火（妙知焼け）
享保十五年（1730年）京都大火（西陣焼け）
天明八年（1788年）京都大火

以上の大災害は丙午・丁未にどのような関連性があるかという点を考え、江戸時代（1603年～1868年）の265年間丙午と丁未に当たる年を並べてみることにする。

慶長十一年（1606年・丙午）
慶長十二年（1607年・丁未）
寛文六年（1666年・丙午）
寛文七年（1667年・丁未）
享保十一年（1726年・丙午）
享保十二年（1727年・丁未）
天明六年（1786年・丙午）
天明七年（1787年・丁未）
弘化三年（1846年・丙午）
弘化四年（1847年・丁未）

以上の年表から、丙午か丁未に発生した「大火」と言える火事は、江戸にも関西にも一回もなかったことが分かる。明暦の大火・明和の大火・文化の大火のいわゆる「江戸三大大火」はそれぞれ丁酉・壬辰・丙寅の年であり、何れも丙午・丁未に無関係である。江戸時代に強いて丙午・丁未に関係のある災害は以下の通りである。

寛文六年（1666年・丙午）諸国風水害

天明六年（1786年・丙午）江戸の大水害

弘化四年（1847年・丁未）善光寺地震

丙午年には大火ではなく、二回にもわたって大水害に遭っている。これは陰陽五行説でも説明しにくい現象であろう。丙午が丁未より火事に直接的関係が多いという説は説得力が足りないように見える。東京消防庁の『消防雑学事典』にも「丙午は火災が特に多いという事実を裏付けられる年ではなかったようです。むしろ反対に、昭和四十一年は全国では、前年の火災件数が戦後最高の記録を残したのに対して、6,100件も大幅に減少しています」¹⁶と記されている。また、同書によると、「丙午山の雌馬は雄馬をかみ殺すという中国の俗信が、江戸時代の初期に日本に伝えられ、天和二年の八百屋お七の火事で、お七が丙午の生まれであったこともあって、女性の結婚に関する丙午迷信が根強くなったようです。お七が誕生した寛文六年（1666年）には、海の方こうのロンドンで、13,000余戸を焼き五日間燃え続けたロンドン大火がありましたが、これも丙午に関係するのでしょうか？」¹⁷とある。丙午俗信の由来で「丙午と火災を結び付けた」画期的な事件はやはり天和二年（1682年）の江戸大火であろう。天和の大火はお七火事とも呼ばれ、後に井原西鶴の浮世草子『好色五人女』の八百屋お七は、丙午年生まれであり、恋人に会いたい一心で放火をし、捕まって火刑となった。

八百屋お七のほか、歴史上の人物で後世に語り継がれた千姫や白木屋お駒たちも、丙午年生まれの女性であったという。二代将軍徳川秀忠の娘である千姫は、政略結婚で豊臣秀頼の夫人になり、大坂夏の陣で豊臣氏が滅んでから本多忠刻と再婚し、また30歳で寡婦となったという。江戸日本橋の「白子屋」の長女である白木屋お駒は、「白子屋事件」の主犯であり、密通と夫の殺害未遂という重罪を問われ刑に処せられたという。八百屋お七が事実上火事の被災者であるか放火者であるかにもかかわらず、またこ

これらの女性たちが確かに丙午年生まれかどうかはさて置き、何れも夫を食い殺す女であると人々に信じられている。こういった話題も、後世に演劇・芸能等の題材とされ、それを流布させることによって、根拠に乏しい俗信を本当らしくさせたのであろう。丙午俗信に関する史料を調べたら、すべてのものは1682年以降である。

1686年刊の『婦人養草』によると、「丙午の女性は夫を殺す性なりと世俗にいふ」とある。したがって、17世紀後半には丙午の俗信が存在していたと考えられる。享保十一年(1726年)の丙午に際しては、この年に妊娠した女性が流産の薬を用い、そのために命を失ってしまった例が多かったと伝えられている。また天明六年(1786年)の時は、『丙午さとし話』に丙午は一年のうち六日だけが該当するのであり、その日に身ごもらなければ大丈夫であると説かれている。文化二年(1805年)刊の『婚姻心得草』には「世俗丙午歳の女は男を殺し、丙午の男は女を殺すとて専ら忌めり」と記載してある。当初丙午に生まれた人は男女を問わずよくないと信じられていたようだが、後に女性だけに限定されるようになっていった。なお弘化三年(1846年)丙午の前年に、『丙午明弁』を始め、丙午が俗説であるとした錦絵などが刊行された。俗信を打破しようという動きもあったのである。

2、羊年禁忌の俗信

羊(未)年生まれの女性は運命が悲惨であり、夫を食い殺すという俗信の由来と言うと、学界の定論はまだないが、劉瑞明は「属『羊』的人為什麼『命苦』？」で、民間で羊年に生まれた人が悲惨な運命に弄ばれ、特に羊年生まれの女性との結婚が忌まれるという俗信があり、それは『易・説卦』の「相揚(yang)四白」が語呂で「相羊(yang)四白」になり、「紅(hong)羊劫」が語呂で「婚(hun)羊劫」になるからであると主張している。本論は上述の研究を参照した上、その由来を簡単に纏めようと思う。

『易経・巽卦』には「巽りて床下に在り」という卦がある。『説卦』によ

ると、「巽を木とし、…白眼が多いとし、利に近づいて原価の三倍で売るとし、巽をきわめればさわがしい卦とする」とある¹⁸。唐の孔穎達の『疏』によると、「躁人之眼，其色多白也」（気短な人は白眼が多い）とある。また、漢の王符の『潜夫論・相列』には、「易之『説卦』：巽，為人多白眼。相揚四白者，兵死，此猶金伐木也」と記載されている。ここでは、白眼が多いと表れる人相を「相揚四白者」と称し、目玉も見えないほど周囲が白色ばかりしている目は「睛(jing) 乏(fa) 於目(mu)」（目に目玉が乏しい）であり、語呂で「金伐木(jinfamu)」になる。つまり白眼の多い人は必ず刀剣の下で死ぬことになる。唐代の人相学には「婦人目有四白，五夫守宅」という説がある。つまり、目玉も見えないほど白眼の多い婦人は、夫以外四人の男と共に密通するか又は五人の夫を食い殺すという。この説に関しては『戦国策』の『斉策一・靖郭君善斉貌辨』に、「太子相不仁，過頤豕視，若是者倍(背)反」とある。即ち太子の相が不仁であり、過頤（下顎が常人よりも大きい）にして豕視（猪子のように盗み見する）をし、このような者が必ず主に背き謀反するという意味である。なお、文言ではよく句頭に「夫」をつけ、判断を強調するから、「人過頤豕視必背反」が「夫・人豕視者背主」になり、句読の誤りで「夫人・豕視者背主」になる。そのうち「夫(fu) 人」は語呂で「婦(fu) 人」になり、なお「背主」に取って代わり、類義語の「忤(wu) 主」はまた語呂で「五(wu) 主」になる。婦人の主はつまり夫のことであるから、「背主」は「五主」になり、即ち「五夫」になるわけである。その上「羊(yang)」は「揚(yang)」と同じ発音だから、いつの間にか「相揚」が「相羊」(羊年生まれ)になったのである。上述したように、語呂や誤伝で出典より次の通り変化してきたのである。

「相揚四白」→「相羊四白」

「夫・人」→「夫人」→「婦人」

「背主」→「忤主」→「五主」→「五夫 (守宅)」

すべてのキーワードを纏めてみると、「相羊」+「婦人」+「五夫」になり、羊年生まれの婦人が夫を五人も食い殺すという俗信は成り立つようになるわけであろう。

一方、「丙午・丁未」を厄年にする「紅(hong)羊劫」がまた民間の伝播で発音に近い「婚(hun)羊劫」になるという説もある。「丙は火に属して色赤く、未は羊」という「紅羊劫」の「紅」は火の代表であり、「火(huo)」という漢字は外形においては「灾(災害)の字に似ているし、発音においては「禍(huo)」(災難)と通じているから、どちらにしても縁起の悪い凶事であると思われる。そういう発想から、羊年生まれの女性との結婚や、羊年の結婚は、どちらも災いをもたらすという「婚羊劫」の俗信になるわけである。

なお、華新は『『十羊九不全』的真相』で、「十羊九不全、一人坐殿前」(未年生まれの人十人で九人は悲惨な人生を辿り、幸福に恵まれる人は一人しかいない)という民間で流行している俗語に対して、古代から伝承してきた「十羊九福(fu)全」は本来幸福で円満であることを象徴していたが、後に「十羊九弗(fu)全」(弗:否定を表す)と間違い、更に「十羊九不(bu)全」(不:否定を表す)と誤伝されるようになったと解明している。また、清代の咸豊(1850年~1861年)以前この説はなかったが、慈禧太后(西太后)が羊年生まれだから、この俗信の伝播は反対者が強い反発で打倒活動のために採った政治策略であると提唱している。西太后は道光十五年(1835年・乙未)に生まれ、清の咸豊帝の側妃で、同治帝の母である。咸豊帝が31歳の若さで崩御し、西太后は26歳に未亡人になり、同治、光緒兩帝の在位期間47年間清末期の事実上の権力者である。西太后は宮廷内政治に手腕を発揮する一方、洋務運動を推進する曾国藩、李鴻章ら洋務派官僚を登用した。清朝内部においては並ぶものなき権力者でありながらも、列強国には譲歩せねばならないことが多く、その統治は民間の憤懣を蓄積させていた。なお、曾国藩が1811年(辛未)に生まれ、李鴻章が1823年(癸未)に生まれ、何れも西太后と同じく未年の生まれであり、満州族打倒に立ち上

がった反体制派の討伐により、列強に抵抗しなかった漢奸とされ非難に晒されながら、「十羊九不全、一人坐殿前」という俗語も中国で広く伝えられるようになったと考えられる。

四、俗信の現状

文部省迷信調査協議会が昭和二十一年と昭和二十四年に行った「各地に於ける慣習状況調査」では、新暦・旧暦、十二支・十干、日の凶吉、方角の凶吉、厄年、化け物・幽霊やおみくじ・ト占などについての調査が行われた。昭和二十四年の調査においては丙午、厄年、鬼門、友引と男女合性に関する回答は次の第1図のようになる。

肯定者の比率から見れば、これらの俗信への積極的な支持者率は、家相、厄年、日の凶吉、合性、丙午という順位になる。中間の回答（半肯定・分からぬ）も含めれば、支持者の率が50%も超えるのは4項目にも達することになり、丙午の支持率も半分近くになる。

昭和四十一年（1966年）は丙午年であった。この年日本の出生数は136.10万人であり、前年の昭和四十年は182.37万人であるから、46万人余も出生数が減少したことになる。そして翌年昭和四十二年の出生数は193.56万人で、前年の丙午年に比べ57万人余の増加となっている。「昭和四十一年は、例年に比べ特異な動きを見せ、出生は丙午の影響で出生数・率とも史上最低を記録」²⁰と指摘されている。丙午俗信のために、結婚が

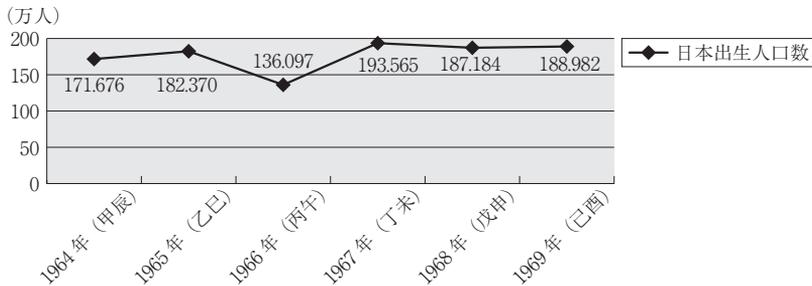
問題別	肯定 (%)	中間 (%)		否定 (%)	無記入 (%)
		半肯定	分からぬ		
丙午の女の人の性格はきついと思いますか	13.70	30.97		54.29	1.04
厄年には何か悪いことがあると思いますか	35.79		29.33	34.28	0.60
家相のよしあしがあると思いますか	46.57		28.62	23.87	0.94
日の凶吉（仏滅・友引・大安など）を使いますか	33.02	43.76		22.78	0.44
縁組の時、合性を問題にしますか	22.70	35.68		40.84	0.78

第1図 昭和二十四年迷信調査結果

文部省迷信調査協議会『日本の俗信3 生活慣習と迷信』より¹⁹

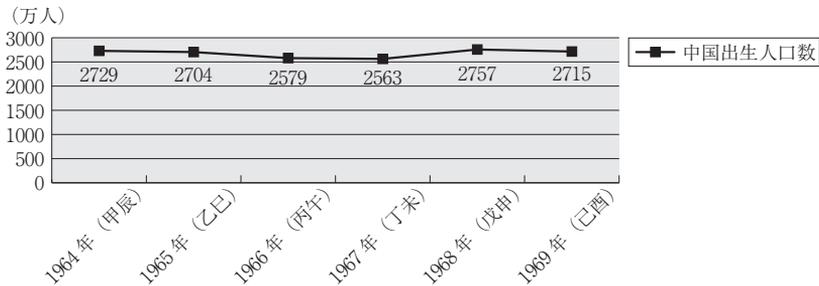
比較的遅い・大変・もらわれないのである。さらに便法として生まれた日をずらしたり、年齢を偽って嫁に行ったりしたという。

日本で話題になった1966年の丙午年をはじめ、その次の1967年の丁未年も含め、日中両国ではその前後の1964年—1969年出生人口数がどういふふうに移したのか、第2図と第3図で示した通りである。第2図で分かるように、1966年の丙午年日本の出生人口数はこの6年間で最低であり、次の1967年の丁未年はかえって最高である。日本で丙午俗信がいかに国民に根強く浸透しているか、また丁未の厄年説がいかに無視されているかを示している。第3図で示したように、中国では1966年の出生数は2,579万人であり、前年の2,704万人より、4.6%減少したことになる。しかし翌年1967年の出生数は2,563万人で、前年の丙午年に比べ増加したところ



第2図 1964-1969年日本出生人口数の年次推移

厚生労働省ホームページ：「平成30年(2018)人口動態統計の年間推計」より作成²¹



第3図 1964-1969年中国出生人口数の年次推移

CNKI 中国经济与社会发展统计数据库：「中国经济社会大数据研究平台」より作成²²

か0.6%減少となっている。日本のような丙午の前年より25%も減り、また翌年が42%も増えるという丙午の出産を明確に避ける特異な動きを見せなかった。これは丙午の厄年説が中国で無視されているからであろう。また、1967年の丁未年を中心に考察しよう。前年比0.6%減少となっているが、翌年の1968年は2,757万人で、丁未より7.6%増加となっている。日本の丙午俗信と比べ物にならないが、中国で丁未の出産が望ましくないという傾向が多少見られると言えよう。

西暦年	干支	出生人口数 (万人)	前年比
中 略			
1966	丙午	2579	
1967	丁未	2563	0.6%減少
1968	戊申	2757	7.6%増加
中 略			
1978	戊午	1745	
1979	己未	1727	1.0%減少
1980	庚申	1779	3.0%増加
中 略			
1990	庚午	2391	
1991	辛未	2258	5.6%減少
1992	壬申	2119	6.2%減少
中 略			
2002	壬午	1647	
2003	癸未	1599	2.9%減少
2004	甲申	1593	0.4%減少
中 略			
2014	甲午	1687	
2015	乙未	1655	1.9%減少
2016	丙申	1786	7.9%増加
後 略			

第4図 中国未成年出生人口数の年次推移 (1959-2018年)

CNKI 中国経済与社会発展統計データベース：『中国经济社会大数据研究平台』より作成²³

中国で丙午俗信のように民間で広く伝えられる「羊年禁忌」は丁未の年のみならず、十二年ごとに巡ってくるすべての未年を禁忌の対象としている。この俗信が中国でどれ程の影響があるか、本論は今より最近の1959年から2018年に至るまで六十花甲子を対象に、考察しようと思う。この六十年間で未年に当たる年は、それぞれ1967年、1979年、1991年、2003年と2015年である。これらの未年を巡る前後1年間出生人口数の推移は第4図の通りである。1967年、1979年と2015年の未年は、いずれも前年の午年より出生人口数が減少し、また次の申年に増加する傾向がある。ただし、1991年と2003年の未年は前年の午年より出生人口数が減少するが、次の申年になっても依然減少するという異例がある。それは長年の人口政策で1990年代以来出産適齢女性数の激減と総和生育率（合計特殊出生率）の持続的な低迷に関係があると考えられよう。また2002-2003年中国を中心に発生したSARS（重症急性呼吸器症候群）は2003年前後の出生人口数を低下させるわけもある。この六十年間の年次推移から見れば、未年になると出生人口数が低下する傾向があると言えよう。ただし、時代の推移と共に、こういう傾向の明確さを再検討する必要もあるように思える。

日中国民の中で今日まで共通に継続している十二支に対する偏好と嫌悪を調べるため、1959年から2018年に至るまで六十花甲子の間、各十二支の累計出生人口数のランキング表を第5図に作成し、比較しようと思う。

日本では午年の出生人口数は十二支で最低であり、丙午俗信の影響が無

単位：万人

	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日 本	十二支	子	亥	丑	寅	卯	辰	巳	未	申	戌	酉	午
	出生人口数	744	742	737	730	714	709	703	693	675	670	662	644
中 国	十二支	卯	寅	辰	酉	巳	戌	午	申	亥	未	子	丑
	出生人口数	11023	10617	10445	10250	10240	10185	10049	10034	9929	9802	9685	9506

第5図 十二支累計出生人口数のランキング表（1959-2018年）

厚生労働省ホームページ：「平成30年（2018）人口動態統計の年間推計」

CNKI 中国経済与社会発展統計データベース：「中国经济社会大数据研究平台」より作成²⁴

視できないであろう。中国では未年の出生人口数は第10位にランクされ、最低までならないが、第1位の卯年と1,221万人の差があり、国民の未年出産を回避する意識が多かれ少なかれ役割を果たしているのであろう。ランキングから見れば、日本では未年より午年の数が少なく、中国では逆に午年より未年の数が少ない。午年と未年は何れも上位のランクに入らず、国民に好まれるものとは言えないだろう。同じく「丙午・丁未」厄年説よりスタートした俗信が異なる国で異なる文化・信仰・民俗等のもとの、異なるものになったのだろう。

五、日中俗信の比較

1、共通点

(1) 死亡への恐怖

東洋文化の媒体である漢字が表意文字であるため、物事への認識や考え方がそのまま漢字自体に反映しているし、また使用者に強い影響を与えている。日本語で「わざわい」という語に災・禍の文字が使用されている。中国語の「災」と同じように、その中に「火」の字を含んでいるため、これを人間が恐れている火災と解釈したのだろう。五行説に従えば、丙午は火陽・火であり、丁未は火陰・土であるから、どちらも火に関連している。歴史上の事件や代表的な人物を連想し、丙午・丁未は災いの年と認められるようになる。人間一生で遭ったすべての災いで最も忌まれるのは死亡に過ぎない。現在でも、葬式に参列したら帰宅する時、家の中に直接に入らず、日本では身体に塩を振りかけてもらったり、中国では火鉢をまたいで通る風習がある。これは死を穢れとするいわゆる「死穢・黒不浄」の意識から発し、穢れや不祥を祓う習俗である。両国の言語では「死」という語自体は言うまでもなく、さらに「四」という数字をはじめ、「死」を連想する言葉や物事さえ禁句とされている。『礼記・曲礼』では「天子の死は崩と曰い、諸侯は薨と曰い、大夫は卒と曰い、士は不禄と曰い、庶人は死と曰う」とあり、張拱貴の『漢語委婉語詞典』（北京語言大学出版社、1996年）

に死亡類の婉曲語が481語も収録されている。中国には死に関する禁忌も沢山ある。例えば、贈り物をする時、「送鐘」（鳴り物の時計を贈る）をしてはいけない。というのは、これが葬儀の段取りを整える「送終」（死に水を取る）という言葉を連想させるからである。榎垣実氏は『日本の忌みことば』で日本において記録に残された最も古い忌み言葉『斎宮忌詞』で十六語記されているうち、死の忌みが七語、後の九語が仏教用語で、これも死と結び付いていると指摘し、「死ぬ」の諸表現を挙げ、日本人の生命への強い執念を説いている。日本の禁忌習俗で「北枕にする」とか、「水に熱い湯を入れる」とか、「服を左前に着る」等の行為がタブー視されるのは、葬儀に関する習俗を連想させるからである。また、箸の儀礼として日中共通に供え箸と二人箸が禁忌とされている。御飯の中に箸を真っ直ぐに立てるのは葬式の供えた箸に見えるようだし、二人で四本の箸を使って一つの食べ物を取るの納骨の時の動作と同然だと思われる。これらの行為は死亡への恐怖により禁物とされている。さもなければ、不祥事を起こす前兆とされ、人に不幸をもたらすと信じられている。「夫を食い殺す」という最悪の結果をもたらす丙午と羊年の禁忌俗信は、人間の心に深く秘めた死亡への恐怖を最大限にそそったに違いない。

(2) 女性への差別

丙午の俗信も羊年の俗信も女性だけを禁忌の対象とするのは深く考えさせる問題であると思う。生理中の女は「お仏飯に触ってはいけない」「神社の鳥居をくぐってはいけない」とか、妊娠中の女は「農耕機具をまたいではいけない」「葬儀に行ってはいけない」「川や橋を渡ってはいけない」など女性に対する禁忌が様々ある。それは恐らく、古代人の「血穢」観と「産穢」観に由来している。『日本民俗大辞典』によると、「血穢」は、「月経と出産時の荒血は、穢れたものと見なされてきた。これらは赤不浄・アカビなどと称され、(中略)月経中の女性はその期間、産婦は出産が近づいたころから産後の忌明けまで、家から離れて別小屋で忌籠りの生活を送った。別小屋がない場合も、食事を作る火は家族とは別にした。月経・荒

血に限らず、血を穢れとする観念は当初神社・神事の禁忌として現れた²⁵と記されている。また、「産穢」は、「出産に伴う穢れ観。出産後、産婦や新生児だけでなく、出産のあった家までが穢れの状態になるとされる。妊娠中から穢れているとする地域もある²⁶と説明されている。中国でも昔から女性の経血が神聖を汚す「血穢」であるとみなされ、妊婦は出産時に出血するため、不浄なものであるとされていた。男性は産屋に入らない風習もあった。仏教の伝来に伴い、中国の血穢思想は明代に血盆経信仰に形成され、室町時代に日本へ伝わった。中国の血盆経は血の池地獄に落ちるべき女性のことを指しているが、その夫も十分の三の罪責を負わなければならない。しかし、血盆経が日本に伝わると女性の罪だけを指すようになる。伝来初期の頃は、出産時の血穢だけを指していたが、19世紀に入っからは生理の血穢をも指すようになった。21世紀になっても、「大峰山」のような宗教場所だけでなく、相撲の土俵、トンネルの工事現場、遠洋漁業の船など、ある特定の空間に女性の立ち入りを禁止した「女人禁制」が日本に依然として存在している。これらの根底には、血の穢れに対する不浄観、仏教に見える女性蔑視思想、儒教の「三従四徳」という男尊女卑思想など日中共通しているものがある。そういう考えに基づき、女性に対してある種の畏れを抱き、女性には穢れや不祥なものがついているとして、両国とも丙午と羊年の禁忌俗信を伝播している間、男性と結び付けず、女性に専属する禁忌に設定したのだろう。

(3) マスコミの宣伝

丙午俗信が流布するようになった背景に、江戸時代の木版印刷の普及がある。「お七以後恋にこがれたものも無し²⁷」のような丙午生まれの女をからかう川柳が印刷され、俗信の普及を助けたことが見逃されてはならない。明治・大正時代の文豪夏目漱石でさえ、『虞美人草』で主人公の藤尾という女性を非常に私の強い女性として描いているが、作品の中で「藤尾は丙午である」と言わせている。井之口章次は『日本の俗信』に、「丙午は昭和四十一年に大いに話題となり、出生数が前年より25%も減るという事態

を招いたが、丙寅に生まれた女も夫に乗り勝つと言って、江戸時代には忌まれていた。ただマスコミに騒がれなかったために、明治以後問題にされることがなくなった²⁸と述べていて、マスコミの影響下で丙午俗信が広がったことを示唆している。皓星社の明治期から現在まで、総合雑誌から地方誌まで雑誌記事索引集成データベース『ざっさくプラス』²⁹で「丙午」を検索すると、1859年から2018年まで総571件あり、例の1966年(丙午)は6件、前の1965年は10件、次の1967年は7件である。この160年間でもう一つの丙午年1906年は64件、前の1905年は0件、次の1907年は6件である。その中で1906年の爆発的な激増には最も注目すべきであろう。マスコミの過剰的且つ情熱的な宣伝は丙午に対する俗信を国民の胸に深く染み込ませ、広く伝播させ、次の丙午年1966年の出生人口数に強い影響を与えたのだろう。ちなみに、同データベースで井之口の言った「丙寅」を検索すると、160年間で総111件あり、丙寅に当たる年は1926年と1986年であり、1925-1927年はそれぞれ0件、32件、8件で、1985-1987年はそれぞれ1件、7件、4件である。1985-1987年の日本の出生人口数を調べると、それぞれ143万人、138万人と135万人であり、確かに井之口の述べた通り「問題にされることがなくなった」状態である。「丙午」と「丙寅」の検索結果を比べてみたら、丙午は総件数が圧倒的に多く、丙寅は前後の年より多少増加するが、丙午のような激増が見られないということがわかる。また、1906年と1966年の丙午年、1926年と1986年の丙寅年の件数を別々に比較すると、全部右下がりの帰趨であり、科学の進歩と社会の発展に伴い、非合理的な俗信に対するマスコミの態度が日増しに理性的になりつつあると言えよう。中国では羊年の禁忌に対してマスコミの集中的な宣伝に関するデータは見付からないが、2003年(癸未)の前年2002年(壬午)に「馬宝宝」(午年生まれの子)という話題を呼んだ記事がインターネットや各地の新聞に多くみられる。例えば、「『馬宝宝』擠爆産房」(李学梅・張相祖『北京日報』2002年6月4日)、「年底突遇分娩高峰」(『北京青年報』2002年12月7日)と「迷信羊年不吉利、馬年『扎堆』生宝宝」(高

風、2002年12月27日新華網太原電)等によると、未年の出産を避けるが故に、北京をはじめ、太原・青島・厦門など中国各地でその前年にいわゆる「馬宝宝」を生むため数多くの産婦が産婦人科に殺到し、予約もできないほど満員状態になっていたようだ。その次の未年は2015年(乙未)に当たり、2013年に政府が実施した「単独二孩政策」(夫婦の一方が一人っ子的場合、2人目の子供の出産が認められる政策)は何十年ぶりかの人口緩和政策であったが、急激な出生人口数の増加は意外に見られず、2014年には小幅に増加するが、第4図で示したように2015年の未年には増加するどころか、逆に前年より1.9%減少となっている。その年に追加した「全面二孩政策」(夫婦2人目の子供の出産が全面的に認められる政策)のせいか、2016年の出生人口数がより顕著に増加するようになる。そうした変動の背後には複雑な要因が絡んでいるが、2015年(未年)の反動減は興味深いことであり、上述したマスコミの宣伝は多少貢献があると言っても過言ではないだろう。

2、相違点

(1) 異なる志向

「丙午・丁未」厄年説より発足した両国の俗信は、日本においては丙午のみに関係あるように限定され、中国においては丁未よりすべての未年に拡がり忌まれるようになる。王少鋒は『日・韓・中三国の比較文化論—その同質性と異質性について—』で、島国の日本は受信文化・融合文化・縮み志向であり、大陸の中国は発信文化・併存文化・拡がり志向であると纏めている³⁰。海に守られ外来侵略と異民族の支配がないため、日本は強制的な外来文化の受容はまったくなく、積極的に受信し、さらに巧みに融合して日本化する。受信文化の特徴として、選択の可能性がある、情報量を多く受け入れるため、凝縮機能が重要になってくる。李御寧が『縮み志向の日本人』で主張した縮み志向論のように、大きなものを小さくする凝縮能力は世界中で日本が一番優れ、凝縮された世界に美を見、小さい空間に多くの情報を詰め込んで価値を生み出すのが得意である。逆に中国は発信

によって自国の文化を周囲に広げていくので、一種の拡大志向の文化であろう。本論で論じている丙午と羊年禁忌の俗信のほか、日中の厄年の俗信を考えてみよう。日本には「厄年」という俗信があり、厄難に遭う恐れが多いと信じ、1年間忌み慎む年齢である。陰陽道の説によるもので、男子は25歳、42歳、61歳で、女子は19歳、33歳、61歳という。あるいは語呂から33歳（散々）、42歳（死）、49歳（死苦）など漢字をあわせてその年を忌む風もある。それに対して、中国には「本命年」という俗信があり、十二支の一巡を基本にし、生まれ年の十二支の年に生命力が疲弊し、衰弱する年ごろであるゆえに、病魔などの悪霊に魅入れぬように忌み慎む年であるとされている。日本各地の神社では毎年「厄除け」の札がつけられ、その年に「厄年」を迎える人々の年齢を記し、気をつけるよう呼びかけている。「本厄」の前年を「前厄」、翌年を「後厄」とし、総じて「厄三年」とも称する。日本では厄年を特定の年齢に限定し、厄除けの祈願をするのと異なり、中国では「厄年表」も要らず年男も年女も問わず「本命」の年になると、紅色の帯か下着を身に着けたりし、一年間に災難が現われないように祈願する風習がある。こういう点から、日中の縮み志向と拡がり志向が見られるとも言えよう。

(2) 俗信の伝承

陳舜臣は『日本人と中国人』で、日中国民の相違点の一つとして、「以心伝心」より中国人が「説得」を重視していると指摘している³¹。発信する文化には常に説得が必要である。一方、日本的コミュニケーションの特質である「以心伝心」は受信型の文化背景として現れた現象であろう。上述した二つの俗信の由来を比べてみれば、日本では丙午の年と火災の必然的な関連性に関する証拠もはっきりしていないまま、ただ八百屋お七や白木屋お駒等歴史上の人物についての伝説を、狂句・歌舞伎・浄瑠璃等の大衆媒体を通し、現代の新聞・雑誌・文学作品・ラジオ・テレビ・映画等マスコミの宣伝で広げられ、今日に至るまで長年伝承されてきたわけである。また、中国の場合は、羊年禁忌に関して、『易』や『戦国策』等の経典から

人相学に至るまで、語呂か誤伝の理屈でその合理性を説得している。西太后のような代表的な人物から影響も受けているが、国民の納得できそうな俗信が成立できるように工夫され、長い間伝承されているのである。ここでは両国の国民性と価値観も多少現れていると思う。源了圓は「日本の合理主義」で、「知的面では経験的合理主義、行動的面では目的合理性が優位を占めているのが、日本の合理主義の特徴であろう」³²と述べ、「中国においては、物の理の探求は、一草一木一昆虫の理を窮めることよりも、古典の中に宿る理の探究の方に大きな関心が向けられ、そしてそのことに多くの学者が心血をそそいだのであった」³³という価値合理性を重んずる中国の合理主義を論じている。長島信弘は「外来文化と土着文化」で、日本人の思考様式を西洋人と対比し、「主観的」「総合的」「非論理的」「首尾一貫していない」「曖昧である」などの特徴をあげている。また、「日本では最小メッセージ型のコミュニケーションが特殊に発達し、日本人の非合理的で直感的な世界に対する接近と深く結び付いているように見える」³⁴と指摘している。丙午俗信と羊年禁忌の俗信は両国の異なる価値観に基づき、異なる様式で人々に受け入れられ、また伝承されてきたのである。

(3) 社会への影響

上述した俗信の現状に関する分析から見れば、二つの俗信の社会にもたらす影響はお互いに激しい差がある。中国の俗信より日本の丙午俗信は凄まじい影響力を見せている。こういう現象については民族構成、社会構造及び信仰生活等の面から解明できると思う。日本は海に囲まれ、他民族による政治的な支配を受けることなく、言語も統一され、人種も比較的均質であり、同類意識と集団意識が非常に強く、典型的な集団主義の社会を形成している。集団主義社会では全員一致を志向する同調行動が重視されるため、日本人は自己中心の行動や発言はしない傾向がある。一方、大陸の中国は国土面積が広く、漢民族をはじめ56の民族があり、各民族が独自の言語を持っており、各自の文化を保有している。地域や民族によって、社会構造が非常に複雑であり、価値観や性格も大変相違している。そうい

う背景において、日本と比べより個人主義の社会を形成し、自己主張を重んじている傾向がある。また、信仰生活の面では、日本文化庁の2017年度宗教統計調査によると、平成二十八年には神道系・仏教系・キリスト教系・諸派を含める日本の宗教団体が216,927もあり、信者数が182,266,404人もあるという³⁵。膨大な宗教団体を抱えながら、宗教人口が総人口をはるかに上回っている日本的な宗教状況は古代以来八百万の神々の伝統を持つ国で、神仏への親しみと宗教への潜在的な期待が意外に強いことを物語っているだろう。なお、CNKI 中国経済与社会発展統計データベース『中国经济社会大数据研究平台』によると、2016年中国の各業種社会団体の総数が335,932あり、そのうち宗教団体が4,878あるという³⁶。宗教団体が社会団体総数の1.45%しか占めていないこととなるわけである。長い間「無神論」が主導的な地位を占めているイデオロギーの影響もあるせいも、中国人のより薄い宗教心も反映しているのだろう。信仰や俗信を通して、人々が願望するご利益は「この世」の生活に直接に関わりがあるから、丙午と羊年の俗信に対して、日本人は集団盲従的意識の下で全員一致に信じたり避けたりする傾向を示す一方、中国人は比較的超人間的な力の存在を信じなかったり、人により自己主張で無視したりする傾向があると言える。

おわりに

日本の天文暦法に関する俗信の核心となっているものは、五行相生相克説と陰陽説である。飛鳥・奈良時代に百済・中国から伝えられた大陸文化に伴って五行説と陰陽説の関係した俗信も渡来したが、当初は素朴な姿でそのままに受け入れられるに過ぎなかった。しかし、平安・鎌倉・室町・江戸と時代を推移するとともに、これらの俗信は変遷を経ただけでなく、日本独特の俗信が新たに発生し消長した。習俗の交流と影響は、それ自体のまるごとの伝播ではなく、往々にして文化の受容者側のふるいにかかれ、濾過され改造されるものであり、その民俗の風習とある程度調整

されて改めて新しいものとなる。元の形に似ているものの、新たに異なった様相となるわけである。丙午の俗信はもと発祥地である中国にも増して、社会生活に浸透しているのが、日本禁忌俗信の特色とも言えよう。

注

- 1 井之口章次『日本の俗信』弘文堂、1975年、4-5頁
- 2 新村出『広辞苑・第七版』岩波書店、2018年、2479頁
- 3 『日本大百科全書』（ニッポニカ）、小学館、1994年、<https://kotobank.jp/dictionary/nipponica/>
- 4 『辞海』（夏征農・陳至立、上海辞書出版社、2009年、167頁）の「丙丁」項に「『呂氏春秋・孟夏』：『其日丙丁。』高誘注：『丙丁，火日也。』丙丁于五行属火，因借指火」とある。
- 5 「女子属羊守空房」や「男属羊，黄金堆屋梁，出門不必帶口粮；女属羊，命根硬，克夫克爹又克娘」のような言い習わしがある。
- 6 『辞海』（同4、2652頁）の「羊」項に「通『祥』、『漢元嘉刀銘』：『宜侯王，大吉羊』」とある。
- 7 諸橋轍次編『大漢和辞典・修訂版（巻八）』大修館書店、1985年、956頁。また、『辞海』（同4、898頁）の「紅羊劫」の項に「古人迷信，以為丙午、丁未兩年為國家發生災禍の年份。丙丁為火，色紅；未為羊。因稱國家的大亂為『紅羊劫』。殷克藩『李節度平虜』詩：『太平從此銷兵甲，記取紅羊換劫年』」と同じことを述べている。
- 8 諸橋轍次編『大漢和辞典・修訂版（巻一）』大修館書店、1984年、283頁
- 9 文部省迷信調査協議会『日本の俗信1 迷信の実態』洞史社、1979年、318頁
- 10 富士川遊『日本民俗選集第4巻 信仰と迷信、民俗怪異篇』クレス出版、2009年、43頁
- 11 郭震威、袁艷、茅倬彦「対羊年生育回避効的再討論」『人口与發展』第23巻第1期、2017年、24頁
- 12 譚遠發、孫煒紅、周雲「生肖偏好与命運差異——為何『竜年生吉子、羊年生忌生子』？」『人口学刊』第39巻、2017年、32頁
- 13 俞文豹は『吹劍録』で、「丙午丁未年、中国遇之、必有災」と述べ、洪邁は『容齋五筆』で、「丙午丁未之歳、中国遇此、辄有变故、非禍生於内、則夷狄外侮。総而言之、大抵丁未之災、又慘於丙午、昭昭天象、見于運行、非人力之所能為也」と述べている。
- 14 同9、306頁
- 15 国立公文書館ホームページ：「天下大變一資料に見る江戸時代の災害一」、<http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/tenkataihen/history.html>
- 16 東京消防庁ホームページ：「三の酉の年は火災が多い？」『消防雑学事典』

- http://www.tfd.metro.tokyo.jp/libr/qa/qa_35.htm
- 17 上記と同じ
- 18 「巽在床下」(巽りて床下に在り)について、『説卦』に、「巽為木、…為多白眼、為近利市三倍、其究為躁卦」とある。
- 19 「別表 国民生活慣習(迷信・俗信)調査結果の集計」、文部省迷信調査協議会『日本の俗信3 生活慣習と迷信』洞史社、1980年、1頁
- 20 厚生省監修『厚生指標』、1967年、23頁。板橋春夫『誕生と死の民俗学』吉川弘文館、2007年、30-31頁参照
- 21 厚生労働省ホームページ：「平成30年(2018)人口動態統計の年間推計」平成30年12月21日 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei18/dl/2018suikei.pdf>
- 22 CNKI 中国経済与社会発展統計データベース：『中国経済社会大数据库研究平台』data.cnki.net
- 23 上記と同じ
- 24 上記と同じ
- 25 福田アジオ [ほか] 編『日本民俗大辞典』吉川弘文館、1999年、570頁
- 26 同書、717頁
- 27 佐藤幸治『文化としての暦』創言社、1998年、166頁
- 28 同1、64頁
- 29 皓星社雑誌記事索引集成データベース『ざっさくプラス』<http://info.zassaku-plus.com/>
- 30 王少鋒『日・韓・中三国の比較文化論—その同質性と異質性について—』明石書店、2000年、92-93頁
- 31 陳舜臣『日本人と中国人』集英社文庫、1984年、85頁
- 32 源了圓「日本の合理主義」伊東俊太郎等編『講座・比較文化第七巻 日本人の価値観』研究社、1976年、154頁
- 33 同書、158頁
- 34 長島信弘「外来文化と土着文化」伊東俊太郎等編『講座・比較文化第六巻 日本人の社会』研究社、1977年、339頁と341頁参照
- 35 文化庁ホームページ：2017年度宗教統計調査「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数(系統別)」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00401101&kikan=00401&tstat=000001018471&cycle=0&tclass=000001111515>
- 36 同22

参考文献

- 板橋春夫『誕生と死の民俗学』吉川弘文館、2007年
 伊東俊太郎等編『講座・比較文化第七巻 日本人の価値観』研究社、1976年

- 伊東俊太郎等編『講座・比較文化第六卷 日本人の社会』研究社、1977年
- 井之口章次『日本の俗信』弘文堂、1975年
- 棟垣実『日本の忌みことば』岩崎美術社、1973年
- 王少鋒『日・韓・中三国の比較文化論—その同質性と異質性について—』明石書店、2000年
- 紺谷友昭「拡大する時の俗信」『社会学評論』33巻2号、1982年
- 佐藤幸治『文化としての暦』創言社、1998年
- 新村出編『広辞苑・第七版』岩波書店、2018年
- 陳舜臣『日本人と中国人』集英社文庫、1984年
- 福田アジオ〔ほか〕編『日本民俗大辞典』吉川弘文館、1999年
- 富士川遊『日本民俗選集第4巻 信仰と迷信、民俗怪異篇』クレス出版、2009年
- 諸橋轍次編『大漢和辞典・修訂版』大修館書店、1984年—1985年
- 文部省迷信調査協議会『日本の俗信1 迷信の実態』洞史社、1979年
- 文部省迷信調査協議会『日本の俗信3 生活慣習と迷信』洞史社、1980年
- 李御寧『縮み志向の日本人』講談社、1984年
- 段成栄、王芸佳「从『停電婴儿』到『羊年不宜生子』——兼論如何科学地分析人口現象」『人口研究』第3期、2003年
- 関立勲『中国文化雑説』北京燕山出版社、1997年
- 郭震威、袁艶、茅倬彦「对羊年生育回避效应的再討論」『人口与發展』第23巻第1期、2017年
- 華新「『十羊九不全』的真相」『人才資源開發』第11期、2015年
- 劉惠萍「属相偏好对人口出生的影響」『財經界』第2期、2016年
- 劉瑞明「属『羊』的人为什么『命苦』？」『隴東学院学報（社会科学版）』第16巻第2期、2005年
- 馬妍「吉年生吉子？中国生肖偏好的実証研究——基於1949-2008年出生人口数」『人口研究』第5期、2010年
- 馬妍「北京出生人口規模變動中的生肖偏好和避諱研究」『青年研究』第6期、2017年
- 譚遠發、孫焯紅、周雲「生肖偏好与命運差異——為何『竜年生吉子、羊年忌生子』？」『人口学刊』第39巻、2017年
- 夏征農・陳至立『辞海 第六版』上海辞書出版社、2009年
- 于偉紅、張月明、梁秋生「淺談河北省生肖偏好」『現代婦女』第10期、2013年
(中国浙江財経大学准教授・元大谷大学研修員 日本語学・日本文化)